

視聴覚教材の作成と問題点

水 野 満

I 視聴覚教材のカバーするもの

A. 視聴覚教材の定義

言語の学習は、私たちが私たちのコトバを習得して行く過程を考える時に気付くように、聞く・話す・書く・読むの自然な順序で進めるべきであるというのが現在の言語教育にたずさわる人々の一致した意見です。そこで聞く一話すの段階で大きく浮かび上ってきたのが言語学習への視聴覚教育的手法の応用ということでした。学習の効果を高め得るようなものであるならば考えられ得るすべての手段が使われるべきであることは申すまでもありません。言語は私たちの社会生活における相互の意志疎通の上で重要な役割を果たしていますから、現実のコミュニケーションの状態を考えてみても、視覚・聴覚に訴えてのコミュニケーションの強化ということが如何に大きな要素となっているかも容易にうなずくことができます。

ここで考える視聴覚教材とは、コトバの学習において、その学習を促進させるために利用できる視覚・聴覚に訴えての学習教材と定義しておきたいと思います。現在では未だ言語の視聴覚教育の明確な理論体系はたてられてはいませんが、やがて種々の論議・意見が統一されて一つの学問体系が設立されようと思います。その一つの動きが、わが国で一昨年創立された視聴覚学会であろうと言えましょう。

B. 視聴覚教材の果たす役割

それでは、上で定義した教材をどのような方法で使うべきでしょうか。それにはそれが果たす機能を見きわめる必要があります。視聴覚教材は学

習の促進剤ですから、丁度私たちの健康を増進させたり、また病気を起こさせないように飲む予防薬、あるいは病気になってしまったら早く正常に戻す回復剤と同じように、二つの機能が考えられます。

第一は、学習と視聴覚教材を中心として始める場合のその教材の果たす役割です。学習項目を設定し、その項目をすべて視聴覚教材の導入によって指導して行く方法です。これには考慮すべき問題がたくさんでできます。つまり耳から、目から入れて行く方法ですから、これに適した学習事項を順序よく作っておかなくてはなりません。たとえば、フランス語を学習する際に先ず初心者のぶつかる難問題は動詞の変化です。しかしもしこれを最初から耳から入れてやれば、統一のとれた学習が可能になるかも知れません。ですから従来の規則・不規則・特殊動詞ということばを与えることによる心理的な圧迫を、音の上から整理したものにおきかえて学習させれば、従来の方法よりより少ない抵抗で学習が可能になります。現に当研究所の研究員の一人がこれを試みております。発音・構文の学習の際も、母国語との対比の上で、一連の学習段階が組み立てられるようなものを、受け入れ易いものから与える行き方です。ただこの方法を行なう上で考えられることは、教材作成のために相当の時間を必要とすることであり、その与える順序づけにあたって、学習全体の統一がくずれはしないかという点です。この点に留意しなければなりませんから、周到な準備が必要となつてまいります。しかし、この方法の積み重ねによって最終的には効果的な学習が期待できますから、初めの学習目的さえ明確にたてておけばよいと思います。

第二は、既に設定された学習事項に合わせて教材を作成し、それを学習事項の補強として用いることができることです。既に設定されたというのは、経験と他の学問・特に言語学と心理学の成果から学習事項の導入順・方法が設定されていることを指します。従って、なかには視聴覚教材が使えない場合もあるかと思いますが、これは最初から補強材として使用するわけですから一向に差し支えありません。無理にどうしても視覚・聴覚

に訴えねばならないとすると、返って学習者の思考を惑わすことになるかも知れません。補強できるものであるならあらゆるものを利用することで。しかも既に教場で学習してきたものを、この力を借りて補強し自分のものとするよう役立たせることになるわけです。現在の大勢はこの行き方に賛成しています。

以上のような視聴覚教育に対する二つの見方は、学習を行なわせる目的の設定即ち第一義的にか第二義的にかの相違から考えてきたもので、視聴覚教材が言語学習そのものに果たす役割から考えれば他の見方も成立します。たとえば、言語学習が当面の課題ですから、その学習を直接に援助するかどうかを見て行った場合には、一つの文型を習得させるために録音教材を何回となく聞かせると言った形は直接的利用と言えましょうし、その文型を使う背景と言ったものを与えることによって更に理解を強めさせるといった行き方では、強化利用とも言うことができます。

いずれの場合にしても、要するに言語を習得させるという共通の課題をより効果的な方法を駆使することによって達成しようということには変わりありません。ただここで必要なことは、先ず教師自身が指導目的を明確にした上で視聴覚教材を扱って行かねばならないということです。私自身としては、第二の補強的な行き方が、現実の問題として、また教師が学習者と直接のつながりを持つという教場での直接指導の学習者に与える心理的要素とも併せ考えて、もっとも適切なものと信じています。

II 視聴覚教材の利点と問題点

A. 利 点

1. 視覚教材

常識的に考えてみても、視覚教材の利点は直ぐ浮かびます。教場内へ指導項目で扱われているすべての物・場面等を持ち込むことは不可能です。限られたものは直接そのものを学習者に接しめることが可能であることは

勿論です。しかし持ち込むことのできないものについては、それに代るものとして、絵・写真・映画を使うことができます。物体等を用いることによってそれらが直接コトバと結びつかせたイメージを学習者の頭脳に刻むことができます。動的な要素を提供することにより、各自がそれに併なって起こる思考形成過程と結びつかせて、より鮮明なものとして学習することができます。従って記憶の維持にも役立ちます。絵なり写真なりで表現されたものが、その表現法から学習するものの姿を強烈に頭に刻むことができるという利点を持ちます。私自身の経験としては、これは英語の場合ですが、Halloween の時にも使われる pumpkin を教える際、たまたまありました農場から農夫がそれを取りあげて示している写真を見せたところ、学習者が後で語ってくれたことなのですが、なるほどかぼちゃはあのような葉を持つものかという認識と連結させて覚えたということでした。

またある表現を学習させたい場合、どうしてもそれが使われる場面が説明の上からも、理解の上からも必要な場合がたくさん起こってきます。こうした時に写真なり、スライドなり、映画、特に映画の場合動きを伴うのでその効果が増大されますが、その場面の設定に大きな力となり、理解と学習を容易にさせることができます。語学学習にどうしても必要な反復動作を効果的にし得るのが映画という見事な手法です。フランスで作られた語学学習映画ですが、三人の老嬢が、家の外で起こった事件を目撃した一人の老嬢に、数秒をおいてやってきて質問する場面でした。こうした手法によって反復という、とかく機械的・単調になりがちなものを抵抗なく実施させることができるわけです。絵によって何時でも簡単に presentation ができるという点です。ここで考えねばならないことは簡単さ、簡潔さということです。それによって、特に学習者が成人の場合には、絵なり写真なりが余りにも elaborate な場合にそれから連想させられる他の概念を規制することができます。つまり余計な他の概念によって、求める表現が出るのに時間をかけることがないということです。

2. 聴覚教材

第一に考えられる点は、教師自身が教える言語の native speaker でない場合には、聴覚教材によってそれを補うことができることです。ここでは日本人で外国人に日本語を教える方たちが対象ですので、この点にあてはまりませんが、それでも忘れてはならない点は、聴覚教材を使うことによって学習者にいろいろな話者の speech を聞かせることができることです。多くの話者の speech に接する機会を与えることは、聴覚教材特に録音テープ教材がなくてはできないことであります。それと同時に、学習者の特定の人の声でなくては理解ができないという弊害を取り除くことにもなります。

第二は、学習者の学習を平均化することができることです。特に録音テープ教材を使うことによって、特定個人に対する指導が多くなるという弊害が起こらなくなります。意図する学習項目を同一の速度で学習することができます。

第三は、教師一人で同じ教えるものを繰り返して行なう際に、同一人の発話ではあるがそれを繰り返しているうちにそれぞれに差異ができ、これが学習者にどれを取ったらよいかという疑問を起こさせますが、この不統一になってしまう弊害を録音テープ教材が取り除くことができます。繰り返えしという動作から、個々の発音も変えることもありえます。ですから学習を果たすためにはできるだけ同じ条件下の発話に接しめることにより、ともかく学習項目を習得させることが必要です。

第四は、一定の速度で与えられる stimulus に対する response を一定のポーズ内でしなければならないようにデザインされたテープを使用することにより、ともかく stimulus に対して迅速に response を与える自動的な習慣をつけさせるのに大いに役立つということです。実際の日常のコミュニケーションにあたっては、この習慣は特に大事になることです。教師自身が stimulus を与えるとなると、どうしてもそこに人情が起こり、生徒の response がでるまで待つということになり、これがかえって re-

sponse を出すまでの迅速な思考形成の過程を作り出す習慣の形成の阻害となります。学習者にとっては最初は辛いことかも知れませんが、長い目で見れば、A を聞けば B が直ちにという autoamtic habit の形成に大きく貢献できることは既に多くの経験が証明しています。

B. 問題点

1. 視覚教材

特にかいた絵を学習者に提示する場合、その絵から学習者のすべてが同一のイメージを描いて response を与えれば問題はないのですが、そうでない場合は問題になります。ですから先に述べましたようにできるだけ簡潔にすることは必要ですが、そのために求める response がゆがめられるようでは適切な視覚教材とはなりません。私自身経験したことですが、これは英語の場合で直接授業の際に使用した時ではありませんが、ミシガン大学に留学した際に外国人なら誰でも受けねばならない英語の試験を受けた時のことです。テープを聞きながら答案にある絵をみて○をつける問題であったように思いますが、この際にかかれていた絵は犬が人を追いかけている絵のようで、求める文を出させるために色々取り得るようなものでした。犬が人を追いかけているのか、犬が人を咬もうとしているのか、犬が人に向かって吠えているのか、この三者のうちのどれにでも取れるものでした。このようなものでは所期の目的を達成するに適した絵とは言えないでしょう。つまり絵の巧拙というよりは表現の仕方によってその絵が教材として適切であるか不適切であるかが定まってくるわけです。

また逆に余りにも elaborate なものと、それに付随して余計な要素を考えさせがちになります。この辺が視覚教材を取り扱う上でむずかしいところです。最終的に適切性を定めるのは、やはりたくさんの学習者に提示して、その結果最も抵抗の少ないものを最適とすることになります。一方的な押しつけは危険で、学習者の立場になって考える必要があります。時間・費用の問題は、どんな教材を作る場合にも問題となることから、こ

こでは言及しないことにします。

2. 聴覚教材

録音テープ教材は、反復練習に用いた場合には、学習者の stimulus に対する automatic response を形成させるのに役立ちますが、その stimulus の長さ、反復回数等から、単調に陥り易い点が問題となります。長時間学習者に聴覚教材を強いることは、直接の指導と違って、集中度を強めねばならないという精神面の緊張・心理面への圧迫から、疲労度が早めにきます。疲労度が増加すれば倦きがきます。従って学習の効果が薄れてきます。特にスピーカを使用する場合には、精神の高い集中度を要求しますから、疲労度が増大しますし、スピーカに対する学習者の位置も考慮しなければなりません。離れていてはどうしても集中が散漫になりがちであることを訴える学習者には、その心理面の学習に対する阻害を除いてやらねばなりませんから、できるだけそれを取り除く必要があります。

録音テープの場合には録音技術の問題にもなりますが、その教材の録音度の鮮明・不鮮明の学習者に与える心理的影響も見逃すことのできない点です。教材としては、雑音の少ない音の明瞭度が高いものを使わなくてはならないことは勿論のことですが、実際のコミュニケーションの状態を考えてみる時には、このような雑音のまざった状態が多いでしょう。初期の段階では学習をさせるのが第一の目的ですから、最良の状態で教材を提示することを先ず考えねばなりません。しかし学習が進むにつれて、必ずしも明瞭度の高いものを使用することなく、その状態にあっても自分の注意を集中し、理解することができるという習慣をつけさせることも必要です。ですから、問題はどの段階から比較的明瞭度の低いものを混ぜて行くかを考える必要があります。

C. 視覚教材と聴覚教材を扱う上での望ましい姿

1. 視覚・聴覚教材の併用

今まで述べてきたそれぞれの利点と問題点を考えてみれば、両者互いに

その欠陥を補なうことができるようその併用が考えられます。視覚教材が response を発せさせる思考過程の成立をイメージと結びつけて強化して行くものであり、それを音に結びつけたイメージにしてやるのが聴覚教材です。両者の併用によって学習者の感ずる疲労・単調さを救うことができます。両者の併用によって学習指導の様々な組み合わせが考えられ、variety に富んだ形で指導を行なうことができます。

III 視聴覚教材の種類

視聴覚教材は先の定義から、とにかく学習効果を増大させるために使用し得るあらゆるものを含みますから、様々な形のものが考えられます。そういう意味で、ここでは両者の教材の種類を広義の意味から考えられるものすべてを考えることにします。

A. 視覚教材

簡単なものから複雑なものまで様々なものが考えられます。

1. 現にあるもの。身近かなものには教場に持ち込み得る実際の事物。指導にあたっては身近にあるすべてのものを有効に使うことが必要です。これには教師の学習項目に沿った身振り、動作を含めて考えられます。事物の説明ばかりでなく、応答の際のうなづき等も忘れられない要素となります。

2. 製作するもの、製作されたもの

板書、カード、絵(絵画も含みます)、ポスター、写真、広告、地図、模型、標本投影するもの。スライド、フィルム・ストリップ。

B. 聴覚教材 ラジオ、録音テープ教材

ラジオの場合には、直接それを教場で聞かせる場合と、必要なものを録音テープにしておく二つの場合が考えられます。従って録音テープも、教師自身が製作するオリジナルなものと、ラジオ・映画・テレビ・レコード等から取ったものがあります。製作するものには、学習すべきものの多くの違った話者による録音も含まれ、また学習の補助となり得る音の録音、

たとえば、電車の音、雨の音、自動車の音なども含めます。

C. 視聴覚教材

視覚・聴覚の両者にうったえるもの、テレビ・映画。

IV 製作上考慮すべき問題点

A. 器具とその製作について

道具を使う場合のその道具の選択はここでは扱わず、視覚・聴覚教材を製作する上で使わねばならないカメラ・テープレコーダーに問題を絞ります。これら器具を用いるにあたっては誰しも高性能なものを望むのは当然のことです。しかもそれらを用いればより優秀な教材が得られることも当然です。しかしこれはその器具のメカニズムとその操作方法を十分にわきまえた結果得られるものです。なまじっかな知識ではかえって失敗作を生むことになります。高性能のカメラを用いれば、露出とシャッター速度の関係が微妙な効果を生みますから、中途半端な知識では不鮮明なものができ上ります。テープレコーダーの場合はカメラほど微妙なことはありませんが、その接続方法と録音状態の読み方の間違いから期待したものが得られなくなります。そこで、簡単に扱い易くしかも間違いなく欲しい作品が得られるものを選ぶことが必要です。第一、経済的な面から考えてもその方が望ましい場合が多いようです。E.E. カメラ、テープレコーダー等はメーカー、エージェンタリから納得の行くまで説明を聞いて選択すれば先ず間違いありません。E.E. カメラの場合には、照明の不足がちな影になる状態にある時や、室内での癖を熟知していれば失敗もなくなります。テープレコーダーの場合には、録音状態を示すマジック・アイをその両端を重複させないように録音することがこつですが、機械によっては多少した方がうまく行く場合があります。要は自分の使用する機具の癖を早く掴むことです。これらのことはすべて常識的なことなのですが、ややもすれば見逃してしまう事柄です。

レコード・プレーヤー、ラジオ、テレビ等から録音する場合には、そこから出る音の歪を接続する際に防ぐようにすればよいわけですから、以上のものに output の端子を持っているものを選ぶことが必要です。もしそうしたものが無い場合には、スピーカーに結ばれている両端の線をテープレコーダーの入力と接続すればよいわけです。テープレコーダーに input としての端子がない場合にはその間に抵抗を入れて音に歪をきたさないような配慮も必要です。現在これに適したものには、ソニーで出されている PC3 と名付けられている 8Ω の抵抗が入ったコネクタがあります。

SP 等のレコードから録音する場合は特に針音が気になりますが、これも技術者に聞いて接続の間に抵抗を入れてやりますと、ある程度針音を最小にすることができます。

一般には出力の方のボリュームを適切な所に調節しておき、入力の方のボリュームを余り上げない方が録音がよくできます。しかしこれも何回か自分で調節を経験し、出来上がったものを比較して最適の状態を覚えておくくと便利です。

B. 学習面を考慮した場合

両教材の問題点のところで述べておきましたが、視覚教材の場合特に絵の場合には、余計な考えが起らないような表現法をとることが必要です。映画で人物の動きだけに注意を集中させてある文型を習得させる場合にも、学習者の注意が他の要素、たとえば背景などに集中するようなものでは、視覚教材としては不適切であると思います。特に学習者が相当の学習を経て来た後では、これによっていろいろな事を学習の言語で表現させて見るという付随的な学習効果をあげることもできますが、初めたばかりの学習者に対してはこの点を注意することが必要です。

parttern practice の反復練習のみでは、実際の場面で使いこなせないということを多くの人が問題点としてあげています。こうしたことから pattern practice が無意味なものであるという印象を与えないためにも、

これに situation を与える工夫をしたいものです。それにはどうしても絵なりフィルムによる、あるいは実際の demonstration による場面づけが大切です。とかく聴覚教材を使つての反復練習は、単調に陥り易く、理解に基づいた automatic response が単なる反復のための血の通わない mechanical なものになってしまいます。この点を考慮すれば、たとえば反復回数をあまり多くしないよう、反復練習時間を長くしないよう工夫することが必要になってきます。話者をとりかえることも心理面での気分転換となり効果があがることも考えられます。これらはすべていろいろなグループに試み疲労度の測定と併せ考えて、repetition の回数、ポーズの長さ（学習の文よりもどの程度長くするか）などを定めて、そのグループの構成からみてその都度臨機応変の処置が望まれます。というのは、学習者がどの場合にも同じような習得才能を持つとは考えられないからです。ただここで大切なことは、そうしたことを試みることによって、直観にたよることを避けて、ある程度科学的な裏付けをするという態度を持つことであると思います。

C. 言語学と学習心理学の成果

特にアメリカの構造言語学の成果が導入されて以来、語学教育に一大革新がもたらされ、その効果が従来のそれより一層あがっていることが実証されるようになりました。周知の事実としては、学習言語と母国語との対比から、指導上の強調をどこにおくかが定められ、特に発音の指導には minimal pairs の考えが導入されました。ただこの場合もそれぞれの音を speech の流れに入れしないで isolation の形で出すことはなほ危険です。特に将来その言語を自分の専門とする場合は別ですが、speech の流れの中でそれらの音の recognition をする練習の方が、その音、それからなる語、その語を包む大きな環境、それから意味を持つ発話となるといったコトバの配列の中での理解を促進させることができるわけです。

generative grammar の考え方から、もとになる文を先に習得させ、そ

の文から派生して行く文を順序よく導入してゆく方法も一つの方法です。何人かの構造言語学者が従来の英語の伝統文法の曖昧さについていることから、特に名称にこだわらず、文のある位置を占める語の配列の上から考えて行く substitution drills の構成も考えられます。これらの成果の応用を現場の教師がいろいろと考えて行くことが必要です。

先に述べたように視聴覚教材はあくまで学習を強化する手段ですから、それらの提示によって、学習効果の遅れがある場合には、なぜその遅れが発生したかを、学習心理学的に見て行く必要があります。

また記憶の維持というのが学習上大きな要素ですが、どの位の長さの文までがその記憶の維持上可能であるか、視覚・聴覚の両面から検討しなくてはなりません。

効果をあげる上での報賞の是非も併せて考えなくてはならない問題です。

その他学習者の学習を受ける準備・緊張を強化させる手段として視聴覚教材を考えて行くことが望ましいと思います。

D. 学習事項にそった教材の構成

いろいろな教材の構成法が考えられますが、比較的一般的に流布されている型を考えてみましょう。第一の型は発音練習用、第二の型は理解度につながる質問・応答の型、第三の型は文型練習用、第四の型は自由表現練習用が考えられます。

特に発音上での聴覚教材が果たす役割は大きく、個々の発音の特徴、rhythm, intonation patterns を何回かの反復で話者そっくりの状態を再現させることができます。ただ文の intonation の問題では、あまり強調する点を表面に出し過ぎると、その特徴が過大に取られて、いわゆるいかにも外国人らしい日本語になってしまいます。日本語の疑問文がそれにあてはまります。確かに実際の会話でわれわれは「か」には英語でいう rising intonation を使っています。しかしうっかりこれを強調し過ぎると、こ

れが耳ざわりになるほど高くいう習慣をつけてしまいます。

与える教材の speed についてはどうでしょうか。現在のすう勢は、ともかく natural speed で与えるべきであるという所に落ち着いています。ただ問題は、個々の発音をゆっくり聞かせるという正確度をとるか、流れにそった中で全体を理解させて行くかという点です。ゆっくりするものを使うことによって正確さを把握することも事実ですし、それによって全体の調子をくずさせることも事実です。しかし、現実の問題として、natural なものを繰り返し聞かせることによって全体の調子をくずさせない方が、最終的にはより効果的であると思います。

文型練習で考えねばならないことは、先にも述べましたように理解のないままの機械的な反復では意味がありませんから、substitution での語の一つの位置の取り換えと、それ以上の取り換えを mix したものも考えて、どれをだしても答えられるかどうかを、テストの意味からも必要となってきます。「私は昨日学校に行きました」の文型の学習で、既に一つ一つの語の substitution の学習を終えた後でならば、彼という語が与えられれば、学習者は自動的に「彼は学校に行きました」という response を出さねばなりませんし、「明日」と言えば、当然テンスも考えた結果答えねばなりません。こういった事は同じ型での反復の練習の場合には機械的に出てきますが、混ぜた場合にも出てきてはじめてその文型が理解できたと申せましょう。

特に日本語では onomatopoeia が多くて、学習者を悩ませるようですが、これも録音教材で音を聞かせたり、あるいは映画の中での動きを見せることによって理解度を促進させることができます。抽象的な概念なども、徒らに長い説明を理解されないままに続けるよりは、その場面を与えることによって早く理解させることができます。たとえば、「反射」などという概念も、建物が水面に移ったスライドを見せることによって直ぐに理解させることが可能となります。

E. 疲労と音楽

長時間視聴覚教材による反復動作から、学習者はその疲労から学習の効果がうすれてきますが、従来そのような際には音楽を聞かせてそれを除くことができると言われていますが(たとえば Heubner), これははなはだ疑問であると思います。確かに産業界なども音楽を流しながら、あるいは休み時間に音楽を聞かせてその緊張度を和らげることににより生産をあげていますが、この場合と学習の面の相違を注意しなければならないと思います。生産に従事する場合には、多くの場合思考をわずらわさない本当の mechanical な動作で作業を進めて行くことが多いですから、やわらかな background music の効果があげられようというものです。言語の学習にはどうしても相当程度の心の集中が必要となります。従って一旦学習に向けられた集中力を、音楽によって中断させて、また新たに集中力を換気させようとするには、そこに大きな loss があるように思われます。ですから、聴覚教材を使用していた場合には、イヤホーンなり、スピーカーの音から解放して、視覚教材に移らせるとかをするによって、学習のものから注意をそらさせないようにすることが肝要です。

以上視聴覚教材で考慮すべきことをあげてきましたが、その果たす役割を十分検討して学習の効果の増大をはかることが必要です。